

## がんが私にくれたもの

乳がんサバイバー 古川 愛

誰よりも健康だったはずの私が、急に「病人」に。お腹の中には待望の赤ちゃんがいて、1ヵ月後には出産という幸せ絶頂のタイミング。そんな中で見つかった乳がんは、まさに私を「天国から地獄に」突き落とした。出産や育児だけでなく、病気のことも考えなければいけないが、治療法や副作用、そもそも乳がんがどんな病気なのかさえ分からない。「分からない」という状況が、不安を増幅させた。

そんな私を救ってくれたのは、同じ病気を経験した仲間たち。患者会や病院内の集まりなど、仲間に会えるところに積極的に足を運んだ。「手術後でも温泉に行けるのか?」「抗がん剤の後の脱毛、街中を歩いていて急にパラパラと抜けたりしないか?」「放射線って熱いのか?」今から考えると笑ってしまうようなことも、とにかく聞いてみた。

分からなかったことが見えてくると、不思議と元気が湧いてきた。不安な気持ちを聞いてもらうだけでも、気持ちが軽くなった。仲間のサポートのおかげで、私は前向きな気持ちで病気と向き合うことができるようになった。看護師のサポートも大きかった。治療に関する疑問や不安は、病院が開催していたがんサロンで看護師が親身になって聞いてくれた。希望していた母乳育児も、ほんの数日だったが、産科の看護師が乳腺外科の主治医と連携して実現してくれた。周りから支援を受け、病気について理解できるようになると、気持ちを強く持つことができた。前向きな気持ちが次の行動を後押しし、「私は治療を乗り越えられる」という自信につながった。

出産後、手術、妊孕性温存のための卵巣組織凍結、抗がん剤治療、放射線治療を受け、ホルモン治療のみになった時に職場復帰。復帰したら必ずやろうと思っていたのが、「社内患者会」の結成。仕事をしながら治療をするのが当たり前になりつつある中、同じ職場の患者仲間は、治療と仕事の両立の中で必ず大きな存在になる。そう信じて立ち上げた社内患者会。2か月に1度の茶話会には、毎回全国から10名程度が参加してくれた。

病気は悪いことばかりではない。病気のおかげで、新しい人や、新しい世界に出会えた。ピアサポートの世界の中で、「Cancer Gift」という言葉にも出会った。「がんからの贈り物」という、とても素敵な言葉。治療中に会った仲間や看護師、社内患者会で出会った職場の患者仲間は、がんからもらった贈り物の一つだ。